

「師夷制夷」と「独立自尊」に関する比較研究

— 魏源と福沢諭吉の西洋への対応を中心に —

705-016 粟 孟強 指導教官 千葉 貢

Comparative Study to “Learn the West to Win the West” and “Independence and Self-respect”

— Focusing on the Correspondence to the West of Wei Yuan and Yukichi Fukuzawa —

SU Mengqiang

はじめに

中国の近代化がアヘン戦争 (1840 – 1842) から中華人民共和国成立 (1949) までの 109 年の間、迂回曲折の道程を支えてきた思想は、魏源の「師夷制夷」思想であったといわれている。また、日本の近代化がペリー来航から激動な幕末を経て、明治新政府に多大な影響に与えた思想は福沢諭吉の「独立自尊」思想であったと言っても過言ではないであろう。従って、魏源と福沢諭吉の思想は中国と日本の近代化においても、きわめて重要な意味を持っていることが明らかである。それらの思想はいかに形成されたのか、またそれぞれの時代背景の中で、どう影響し、近現代社会にどんな結果をもたらしたか、について分析してみたいと思う。

従来の魏源研究に関しては、特に『魏源全集』20冊は100年以來の研究成果の基礎の上に、2004年に魏源（1794 – 1856年）の生誕210年に整理し、出版された。現代の魏源研究は新たな段階に入ったと言っても過言ではない。これに対して、日本の福沢諭吉に関する研究も盛んになっているのが事実である。例えば、『「文明論之概略」を読む』という著作は丸山真男がその第一人者といえるだろう。また、北岡進一は『福翁自伝』に関する研究が『独立自尊』というテーマとして明確に現れた。魏源と福沢諭吉に関する研究は近代人物の思想の紹介において、銭国紅の『日本と中国における西洋の発見』の中に関連する紹介の形で扱っただけで、岡本さえの『アジアの比較文化』の中に、それぞれ各節で魏源の『海国図志』と福沢諭吉の『文明論之概略』を紹介しただけである。

これらの研究がいずれも、優れていると思われる。しかし、近代化思想において、魏源と福沢諭吉に関する実証的な比較研究はまだ存在しないのが事実であるといわざるをえない。そこで、本稿

ではこのような研究状況を踏まえ、中国と日本の近代化において、西洋の外圧により、魏源と福沢諭吉の西洋への対応を中心に、「師夷制夷」と「独立自尊」に関する比較研究を試みたい。

本稿の構成では、まず魏源の代表的な思想である「師夷制夷」を中心として分析し、その背景としての魏源の生涯と『海国図志』の影響について論じた。次に、福沢諭吉の代表的な思想である「独立自尊」を中心として分析し、福沢諭吉の生涯と「独立自尊」の影響について論じた。最後に二人の異同点を比較的に分析した。特に啓蒙精神と西洋文明の受容や人材育成の重視を二人の共通点であると論じたが、また、国内政治通である魏源が攘夷論者であることと、西洋通である福沢諭吉が開国論であることが二人の異なる点であることとして比較的に分析した。

I 「師夷制夷」と魏源

(1) 「師夷制夷」とは何か

魏源の「師夷制夷」論は、1842年に清政府のアヘン戦争の敗戦によって、魏源が林則徐の『ししゅうし四洲志』に基づいて編集した『海国図志』の原序の中に主張したものである。原文は以下のよう記されている。

「是书何以作？曰：为以夷攻夷而作，为以夷款夷而作，为师夷长技以制夷而作。」（『魏源全集』第4冊『海国図志』P 1）

「この本は何のために書いたのか？これは西欧列強をもって西欧列強を攻めるために書いたものであり、西欧列強をもって、西欧列強を牽制するために書いたものであり、西欧列強の優れた技術を学んで、西欧列強を制御するために書いたものである。」（筆者翻訳）

当時、魏源の見方は中国の政治と社会の矛盾が激烈しているので、西洋に対して、まず、西洋内部の矛盾を利用して、注目された中国という焦点を避ける。そして、その緩和された時間を利用して、西洋の優れた技術を学んで、最後に、西洋の侵略に対抗して、「清政府の独立」を保つことができると考えられる。明らかに当時の魏源は時勢を見据えた上で、清政府に向けて書いた処方箋であった。また、西欧列強からの脅威に直面している中国国民に危機意識という戦略的な提案であると考えられる。さらに、当時中国は自国中心の「中華思想」があり、外国に学ぶことに抵抗感があるために、魏源は「師夷」の目的が「制夷」にあると強調している。中国国民の考え方の柔軟性を持つことが意識的に重視しているだろう。「制夷」という「国の独立」を果すために「師夷」という西洋技術を学ぶことがぜひ必要であると中国国民に呼びかけている。従って、魏源は一番強調したいのが「西欧の優れた技術」を受容することである。

「師夷」の具体的な方法は戦艦、兵器の製造と軍事的な人材の育成、訓練を西洋の特技に指摘している。さらに、師夷は「戦艦、兵器の製造」というハード面だけではなく、軍事人材の重要性や軍事人材の採用というソフト面にも西欧の特技として挙げている。従って、魏源は文人を取るといって科挙人材だけではなく、武術できる人材も科挙制度に取り入れるべきであると提案したのである。

また、「制夷」には戦術として、守る、攻める、款夷があると具体的に提案した。

いうまでもなく、魏源は清政府の時代遅れを認識したので、西洋の特技を学べば、強い清政府が必ず西洋を超越する能力を持っていると考えられる。魏源の「師夷制夷」論は内からの変革と外への対応が見られる。その戦略により、魏源の世界認識と世界戦略を内外に示したと言えよう。

(2) 魏源の生涯

魏源(1794 - 1857)は、字黙深、清末の公羊学者、思想家、歴史学者、政治家であった。1794年に湖南省邵陽しょうように生まれた。魏源の父・魏邦魯ぎほうろ(1768 - 1831)は江蘇嘉定などで地方官に勤めていた。魏源の生涯も大いに江蘇地域に活躍していた。江蘇地域が海上から一番被害を受けやすい地域であるため、魏源はその影響に直接に受けたのかもしれない。

魏源の生涯を見るためには三段階に分けて見てみよう。第1段階は、青少年期の学習時期と順風満帆な挙人に合格した時期である。この時期が科挙試験を通して、師友との出会いによって、魏源の思想形成において大きな役割を果たしたと考えられる。第2段階は、挙人から進士に合格した時期である。人生の黄金時代といえる23年(29歳 - 52歳)は12回の科挙試験に挑戦しながら、友人の下で、著作と思想を生み出した。第3段階は、険しい地方官生活の時期である。魏源は52歳で、ようやく進士に合格した。そして江蘇の地方官になって、特に塩政、水利、漕運、通貨の改革において、大きな貢献をした。1853年に失脚したが、そのあと復歸した。しかし魏源は、仕官に諦めて、仏教に専心した。

(3) 「師夷制夷」の『海国図志』

魏源が著した『海国図志』は、その軍事地理思想と海防思想を全面的に反映しており、清代後期に推進された自国の軍事を強化する政策を理論武装する役割を果たした。当時の世界各国の地理、歴史、気候、物産、交通、貿易、風俗、文化、教育、生産技術などについて書かれており、附図も充実していて、世界地理志、世界地図集としても価値の高い資料であった。

しかし、『海国図志』が高く評価されるようになったのは、第2次アヘン戦争(1856 - 1860)の敗北と太平天国の大内乱(1851 - 1864)を経て、西洋の軍事機械技術を採用して中国の自強を目指す洋務運動を清朝政府が開始する1860年代以降のことである。それらの評価には『海国図志』が日本に渡ってから、明治維新に役に立つことによって、再度認識したものである。

現代においては、こういう評価がある。楊慎之は「魏源は西洋に学ぶことにおいて、最先端に走っている先進人物であり、中国近代化の里程の中においても、第一歩に入った。すなわち、魏源の第一歩がなければ、洋務運動の第二歩がなし、戊戌維新の第三歩がなし、辛亥革命の第四歩もなしということである」と評価した。いかに「師夷制夷」の重要性があるかがわかるであろう。

日本において、堤克彦によると、特に横井小楠は『海国図志』と『聖武記』に多大な影響を受けて、尊王開国論へ転換した。もちろん、横井だけではなく、幕末の数多くの思想家に多大な影響を

与えた代表的な人物は、小楠のほかに、佐久間象山、橋本左内、吉田松陰などが挙げられる。

II 「独立自尊」と福沢諭吉

(1) 「独立自尊」とは何か

「独立自尊」の由来については、1900年、福沢諭吉の弟子らが慶応義塾の学生のために作成した「修身要領」の第2条に「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位をはずかしめざるもの、之を独立自尊の人と云ふ」という趣旨が示された。これで「独立自尊」という言葉を使い始められたそうである。その形成原因は主に「門閥制度は親の敵である」と「3度の欧米体験による異文化ショック」であると思われる。福沢諭吉は啓蒙思想家として、教育者として、在野政治家として、その精神を忠実に実践した人であると思われる。「独立自尊」を達成するプロセスは「一身独立と一国独立」であると考えられる。

『学問のすすめ』の主な目的は「一身独立する」ことである。「一身独立する」ためには学問を勧めなければならない。『文明論之概略』は「国の独立」を主張した。「今、最も優先すべき課題は日本国の独立であり、西洋文明を学ぶのもそのためである」と「故に、国の独立は目的なり、国民の文明は此目的に達するの術なり」が如実に語っている。

福沢諭吉は国の「独立自尊」を目的として掲げているが、「個人の独立自尊」が「国の独立自尊」の前提条件としている。「個人の独立自尊」のためには学問をすることである。学問をすることによって西洋文明を積極的に受入れることが国民の生活に役に立つ学問であると考えた。すなわち「一国独立する」ためには西洋文明を受容することである。

「独立自尊」の方法は数理学と独立心を強調した。福沢は以下のように記した。

「東洋の儒学主義と西洋の文明主義と比較してみるに、東洋になきものは、有形に於いて数理学と、無形に於いて独立心と之二点である。」(『福翁自伝』全集第7巻、P167)

「独立自尊」の精神は明治維新への影響にきわめて大きいものであった。高橋弘通は「福沢の著作のうち、最もよく読まれ、維新政府の政策決定に大きな影響を与えるとともに世論形成に力を発揮したものは、『西洋事情』と『学問のすすめ』及び『文明論之概略』である」と述べた。特に高橋は『西洋事情』が維新のシナリオと強調した。さらに、「文部省は竹橋にあり、文部卿は三田にあり」ということで、いかに福沢諭吉が影響を与えたのかがわかるであろう。

(2) 福沢諭吉の生涯

福沢諭吉(1835～1901)は近代日本を代表する啓蒙思想家、教育者、ジャーナリストであった。その特徴は特に洋学の塾長としての生活と3度の欧米体験を指摘したい。まず、福沢諭吉は青少年の時に、塾との関わりが深く、それ以降、自分の人生を塾と一生の付き合いになったのである。特に漢学塾長、蘭学塾長、そして英学塾長になったことで、慶応義塾の経営に全力を尽くした。福

沢論吉は漢学、蘭学と英学の達人といっても過言ではないであろう。

次に、3度の欧米体験は福沢にとって人生の転換的な存在であると考えられる。欧米体験こそ、福沢論吉の理想的な「文明モデル」を見つけ出した。日本社会の身分制度と対照的に、大きな衝撃を受けて、今後の日本にそのモデルの導入を自分の使命であると考えたのである。自ら見た豊かな生活と先進的な政治制度に魅力を感じて、日本の未来のモデルとして今こそ実現すべきであると福沢は考えただろう。

「独立自主」を信念として掲げている福沢論吉はそれに一生をかけて実践し、貫いたものであった。「門閥制度は親の敵」と「ペリー来航」の外圧に対して、福沢論吉が考えた「独立自主」は儒教に基づく上下秩序を破棄し、封建的束縛から個人を解放することによって個人の自立を実現すること、これが他国による植民地支配を受けることのない国家の独立を保証することである。

Ⅲ 「師夷制夷」と「独立自主」の比較

(1) 共通点

まず、啓蒙精神と西洋文明の受容について、西洋列強のアジア進出に当たり、アジアの人々に欧米への開眼を迫った最大の要因は、軍事力の圧倒的な差と、それに根ざした危機感であった。魏源と福沢論吉は時代の先鋒に立って、時代認識に敏感な二人が自国民に危機意識を起こさせて、自ら救国の道に啓蒙精神を持って先導した。例えば、魏源の『海国図志』の中には師夷の具体的な方法が戦艦、兵器の製造と軍事的な人材の育成、訓練を西洋の特技と指摘している。福沢論吉は『西洋事情』をモデルとして日本に紹介した。魏源は西洋の特技として軍事的な技術と軍事人材だけを取り上げているのに対して、福沢論吉は「東洋にないものが数理学の精神と独立心」ということで、西洋の政治、経済、文化、社会などの幅広い分野を取り上げ、全面的な西洋学の普及を積極的に展開している。

次に、人材育成の重視について、魏源は軍事人材の育成と採用制度を西洋の特技として学ばなければならないと述べた。福沢論吉は洋学の普及のために、慶応義塾の人材育成に全力的に経営している。二人とも、いかに人材の育成を重視しているのかがわかるであろう。

(2) 異なる点

魏源と福沢論吉の違うところで、最大の特徴というと、魏源は科挙受験によって人生の道が決まることであるのに対して、福沢論吉は儒学と蘭学と英語の勉強によって欧米体験ができて、人生の道が決まったことであった。それによって、国内政治通である魏源が攘夷論者であることと、西洋通である福沢論吉が開国論者であることが明らかである。

おわりに

以上の分析により、近代化において、中国の魏源と日本の福沢諭吉は思想形成と実践活動がそれぞれ違うことが明らかである。しかしながら、「アヘン戦争」(1840 - 1842)と「ペリー来航」(1853)という西洋の脅威に対しては、目的が「国の独立」に一致し、手段が「師夷制夷」と「独立自主」であることを実証的に比較分析してみた。特に以下の3点を指摘したい。

第1に、西洋文明の受容について、魏源は中華文明を自負し、西洋文明をライバルとして受け止め、西洋文明の軍事技術を限定して受容しようとしたと同時に、攘夷論を支持した。ところが、福沢諭吉は日本の「門閥制度は親の敵である」と批判し、西洋文明をモデルとして受け止め、西洋文明の案内者として自負し、開国論を支持した。

第2に、代表作について、魏源の『皇朝経世文編』(1826)と『聖武記』(1842)は国内政治に関する本であり、国内社会を知ることで、「師夷」の必要性がわかる。さらに、アヘン戦争より徐々に西欧諸国を注目し、魏源の『海国図志』(1842 - 1852)は西洋の優れた軍事技術を認め、「師夷」の方法論を強調したと同時に民族危機に対して、「制夷」を支持した。それに対して、福沢諭吉の『西洋事情』(1866 - 1870)は西洋文明を先に日本に紹介した。それから『学問のすすめ』(1872 - 1876)と『文明論の概略』(1875)は日本国内への具体的な提案を「独立自主」の精神を持って述べた。西洋文明の代理人として、西洋文明を受容し、西洋と同等の地位に立つことが真の目的である。

第3に、中国と日本の近代化に啓蒙思想家としての二人はそれぞれの役割を果たしたと考えられる。魏源は国内政治改革者からアヘン戦争による民族危機に際して、「愛民憂国」の精神が見られる。福沢諭吉も「一身独立して、一国独立すること」という「憂国愛民」の精神が日本の国民に広められたと見られる。二人とも愛国主義者であり、自分の国の独立を最優先課題として捉え、国民に向けて啓蒙し、西洋と同じように自国の経済を成長させ、富国強兵の道に行きたいと考えたのである。しかしながら、それぞれの国の状況が違ふことで、それぞれの活動も違っている。魏源の生涯は科挙制度に関わり、知友の補佐官や地方官として、一生を貫いたが、福沢の生涯は塾に関わり、政府に関係なく、一在野の教育者として一生を貫いた。

参考文献

- 北岡進一『独立自主—福沢諭吉の挑戦』講談社、2002。
 佐藤慎一 魏源『海国図志』、岡本さえ編『アジアの比較文化』2003.173-176. 科学書院。
 銭国紅『日本と中国における「西洋」の発見』山川出版社、2004。
 高橋弘通『福沢諭吉の思想と現代』海鳥社、1997。
 堤克彦『横井小楠』西日本新聞社、1999。
 福沢諭吉『福沢諭吉全集』岩波書店、1964。
 丸山真男『「文明論之概略」を読む』上中下 岩波新書、1986。
 杨慎之・黄丽鏞『魏源思想研究』湖南人民出版社、1987。
 魏源『魏源全集』20冊 岳麓書社、2004。